

2016 年度 FD 活動の取組み

1. FD 研修会

「英語による専門科目の教授法のポイント ～LSE の研修を踏まえて～」

講師：東郷 賢（本学経済学部教授/ロンドン大学とのパラレル・ディグリー・プログラム担当）

日時：2016年6月9日（木）14:40～15:40

場所：武蔵大学1号館1101教室

〈研修会の概要と趣旨〉

本学ではFD活動の一環として、毎年一回はFD研修会を行っており、例年、外部から講師をお招きして講演を行っていただくことが多い。しかしながら本年は色々な意味で例年とは異なる試みを行った。

第一の点は、研修会の時間設定である。例年、教授会の行われない木曜日の4時限に研修会を行ってきたが、この時期は特に様々な業務に教員が駆り出されており、近年参加者の減少が見られるようになっていた。そこで本年は、教授会の時間を少し後ろにずらし、本来教授会の開催される時間に研修会を設定させていただき、専任の教員には原則として出席をお願いすることとした。このため、昨年度に比べ、多くの教員に研修に参加いただくことができたと言える。

もちろん、このやり方は良いことばかりではない。教授会の終了時間が後ろ倒しになることは言うまでもないが、例年90分の時間を取って行っていた研修会を、本年は60分に圧縮せざるを得なかった。幸い、講演時間について、アンケート調査では適切であるとの回答が多かったが、今後の在り方についてはさらに検討を続ける必要があるであろう。

第二の点は、テーマに関することである。例年は、より一般的で多くの教員にとって関わりが深いテーマで講演をお願いすることが多かったが、今年をあえて、一部の科目で実施されている、英語での専門科目の授業のポイントというテーマを選んだ。文部科学省の大学のグローバル化への後押しもあり、全国の多くの大学で外国語（特に英語）での講義が増加傾向にあり、武蔵大学経済学部でも、昨年度よりロンドン大学とのパラレル・ディグリー・プログラム（以下PDP）がスタートし、経済学部以外でもカリキュラムの改訂にあわせて外国語での講義が検討されている。このような状況の中、全ての教員が直接関わっていないとしても、外国語での講義について考える良い機会であると感じられたからである。

講師の東郷教授は、PDPの開設当初から中心になって尽力されており、また実際の講義も担当されている。特にPDPの開設にあたって、ロンドン大学との講義の在り方についての意見交換もされているため、その経験を踏まえて今回の講師となっていた。

第三の点は、他大学の教職員を研修会に積極的にお招きしたという点である。昨年度6月から学習院大学・学習院女子大学・甲南大学・成蹊大学・成城大学（以下六大学）と合同FD・SDに関する包括協定を結んでいる。今回の研修会においても、六大学の教職員の参加をいただいただけでなく、質疑の際にも活発な御発言をいただいた。このことによって研修会がより実りあるものになったことは間違いないであろう。

〈講演の要旨〉

東郷先生の講演の前半は、PDPの概要の説明である。本学の教職員にとっては詳しく知っている方もおられたかもしれないが、他大学から来られた方にとっては、その説明は不可欠である。東郷先生はロンドン大学のPDPの世界展開の状況や武蔵大学における学生の参加人数などを豊富な映像資料などを紹介されながら説明された。

講演の後半部分は、ロンドン大学の担当者との講義内容をめぐる打ち合わせを通じて感じた、日本の大学の講義との違いについてである。東郷先生によれば、ただ従来の専門科目の講義を英語で行えばよいという問題ではなく、学生に考えさせ、学生同士で議論させるなどの積極的な取り組みを講義に組み込むことが非常に重要であるとの指摘などが、具体例をもとになされた。

〈質疑の概要〉

限られた時間ではあったが、講演の後、質疑の時間を設け、積極的な意見交換を行った。質問としては、PDPでのロンドン大学の学士号の修得に失敗した場合でも、武蔵大学の学士号が修得できる可能性が高いので、学生が安心してチャレンジできる点のメリットや、PDPに参加していない学生が、どのように参加学生を見ているのかについて、日本人同士が英語で会話することのぎこちなさをどう解消するのかについてなど、様々な点について意見交換がなされた。

研修会後にアンケートを取らせていただいたが、研修会の内容は、参加者にとっておおむね好評であったように思われた。

(文責：河合 康夫)



研修会の様子（左）、質問に答える東郷教授（右）

2. 大学院 FD 懇談会

司会：渡辺 直紀（人文学部教授）

日時：2016年7月29日（金）13：00～14：30

場所：武蔵大学1号館1302教室

前学期の授業が終わる7月末に、今年度の大学院FD懇談会が行われ、大学院生7名（人文科学研究科5名、経済学研究科2名）、教員10名、職員4名が参加した。今年度は、この懇談会にさきだって、6月中下旬に、大学院の教育・研究環境に関するアンケートを実施し、人文科学研究科からは20名の、経済学研究科からは7名の回答をそれぞれ得た。今回の懇談会は、そのアンケートの結果をもとに、大学院生と教員との間で具体的に意見を交換することから始められた。

(1) 授業における論文指導の動機づけ

博士前期課程の学生から、論文指導の授業は2年次からではなく1年次から始めてほしいという要望が出た。これに対して、カリキュラム的に論文指導の授業が2年次以降に行われるのは事実だが、基本的に論文指導は1対1で行うものなので、その意欲があれば、指導教授や他の担当授業の教員に対して、将来の学位論文の執筆の方向性について、個別に指導を受けるのはまったく問題なく、むしろ奨励されることであるという指摘があった。

(2) 学部授業の履修制限

研究上の必要から、学部で英文学の授業を履修したいと思ったが、今年度から大学院生の学部授業の履修について大きく制限が加えられ、履修できなかった点について、問題が指摘された。それに対して、自己点検評価などでも指摘があり、今年度は柔軟な対応ができなかったが、あらかじめ強い要望があれば、授業計画の立案の際に非常勤の方に授業をお願いすることもでき、また対応の仕方によっては、評価を別の基準で行うことを条件に、大学院生の学部授業の履修を認めるような制度的方策は講じられるので、その可能性について追求してみたいという意見が出された。

(3) 指導教授以外の教員との知的交流

日頃の授業などで、指導教授や副指導教授との交流は多々あるが、それ以外の先生方から指導を受ける機会が少なく、大学院生の学術発表会のときなども、出席してくださる先生はやはり指導教授の先生に限られるので、もう少し大学院生と所属研究科の教員との知的交流の場を確保してほしいという要望が出された。それに対して、近年、そのような傾向はかなり強く、改善できるように努力したいとの意見が教員側から出された。

(4) 教員能力開発プログラムの履修単位

教員能力開発プログラムに所属している大学院生は、通常の講義・演習以外にも履修すべき科目が生じうる点について問題が指摘された。それに対して、学部などでも教職科目を履修する場合は別途の努力が必要だが、指摘された点については、確かに不明瞭・不合理な点も存在するので、単位の読み替えなども含めて対応策を検討したい旨が伝えられた。

(5) 図書館の利用方法について

事前に行われたアンケートでは、「希望図書の購入希望にはフィードバックが必要」、「各種データベースの拡充」などの要望が出されたが、これらに加えて、館内の換気が悪かったり（洋書プラザ）、エアコンがあまり効かなくて妙に暑いため、エアコン以外に扇風機を回している場所がある点などについて問題が指摘された。これに対して、今後、改善すべく努力するとの回答がなされた。

(6) TA の契約について

今年度はさまざまな事情があって TA の契約締結が遅れたり、TA に決定した大学院生に対して詳細の連絡にすれ違いがあったことなどが報告された。これに対して、今年度は特に契約が遅れてしまった点について事情説明があり、今後、できるだけ早めに対処する旨が伝えられた。

(7) 『武蔵文化論叢』の編集体制について

今年度から、博士前期課程の学生も『武蔵文化論叢』の編集実務にたずさわるようになったが、特に 1 年目の大学院生は履修する授業も多く、なかなかきちんと対応できていない点が報告された。これについて、編集担当はもとより博士前期課程の学生に担当義務があるわけではないので、大学院生同士でよく話し合ってきたりと役割を分担し、『論叢』の編集業務をよりよいものに作り上げてほしいという意見が出された。また、論文の採否についても、学生同士だと問題になることがあるので、そのようなときはぜひ指導教授や他の先生方に相談してほしい旨もあわせて伝えられた。

(8) 大学院生室の施設・備品など

人文院生室（3302）は、PC とコピー機を複数台使用するとブレーカーが落ちることがたびたびある点、また研究のためにスキャナの購入を検討したい点、大学院生室でのコピー無料使用を今後も維持したい点が、それぞれ大学院生側から伝えられた。これに対して、特にブレーカーの問題は解決に急を要することなので、早急に対応したい旨が述べられた。備品については、適切な手続きさえ踏めば必要なものの購入は可能なので、大学院生同士よく話し合っただけで希望を出すよう伝えられた。

(9) その他（アンケートの自由記述欄などより）

懇談会の場では深く議論されなかったが、アンケートの自由記述欄や、閉会後に配布された「院生代表会議まとめ」などで、以下のような点の問題改善についても指摘された。

- ・大学院特別奨学金が、本人の収入の多寡で判断されるのはおかしい。
- ・キャリアアップコースでも、特定課題研究ではなく修士論文が書ける道を開いてほしい。
- ・就職活動サポートの多様化
- ・開講授業の多様性にもう少し幅があればいい。また、学期途中の時間割変更（あるいは他の曜限の追加利用など）は、もう少し慎重に行ってほしい。

このほかにも大小さまざまな件について、大学院生と教職員とのあいだで意見がかわされた。今後もこの懇談会を実施して、教職員が大学院生の研究・生活状況を把握するとともに、教職員と大学院生が互いに理解を深め、本学大学院における教育・研究環境の改善につながればと思う。

（文責：渡辺 直紀）

3. FD フォーラム「学生と共に考える授業改善」

司会：河合 康夫（FD 委員長、経済学部教授）、中西 祐子（社会学部教授）

担当：杉本 伸（経済学部准教授）、渡辺 直紀（人文学部教授）、中西 祐子（社会学部教授）

日時：2016 年 12 月 15 日（木）16：20～17：50

場所：武蔵大学 6 号館 6103 教室

〈趣旨と概要〉

武蔵大学 FD フォーラムは、学生から授業改善に向けた提案をし、それを受けて学生と教職員がともに検討するものである。今年度は学生 14 名、教員 19 名、職員 7 名の総勢 40 名が参加して行われた。授業改善についての提案を行った登壇者は以下の 5 名である。

神山 竜哉（経済学部 経済学科 4 年）

萩原 綾音（経済学部 経営学科 2 年）

小野 絢香（人文学部 日本・東アジア文化学科 4 年）

堀口 絢香（人文学部 日本・東アジア文化学科 2 年）

竹内 あすみ（社会学部 社会学科 2 年）

本年度のフォーラムでも、昨年度の改善点を引きつぎ、指定テーマ（2 種類）と自由テーマの双方を設定して学生からの提案を募集した。新たな試みとしては、指定テーマの一つを 6 月に行った教員向けの FD 講習会の内容と連動させた点が挙げられる。

1 つ目の指定テーマの「外国語の授業に期待するもの」は、教員向け FD 講習会の内容と連動して設定したものである。武蔵大学では現在、グローバル教育に力を入れており、既にロンドン大学とのパラレル・ディグリー・プログラム（経済学部）が始まっているが、来年度以降はグローバル・スタディーズコース（人文学部）、グローバル・データサイエンスコース（社会学部）が新設される。これらを受けて募集されたのが第 1 の指定テーマである。

2 つ目の指定テーマは「ゼミで実施してほしいこと、ゼミに対する要望」である。武蔵大学の伝統である「ゼミの武蔵」を受け、入学する前の理想と入学後の現実など、提言を募った。これら 2 つの指定テーマと並び、本年度も「自由テーマ」での応募枠も設定した。

また本年度も、学生からの提言の後に、フォーラム参加者全員によるディスカッションを実施した。これは昨年度導入され、高い効果が得られたことが確認された手法である。今年は全参加者数が 40 人と、例年以上の参加者があったこともあり、当初設定したディスカッション用の時間が足りなくなるほど活発な意見交換が行われた。

なお、昨年度は 11 月下旬に FD フォーラムを実施したが参加学生が少数であったことを踏まえ、今年度は FD フォーラムの実施時期を 12 月の年末に移動した。より多くの学生が参加できるように、各学部の卒論提出シーズンや、年内の授業が一段落した年末の時期での開催を企画したが、結果的に昨年を上回る参加者数を集めることができた。

〈提案の論点〉

本年度提案された内容の主な論点は、以下の 3 点に集約できる。

(1) パラレル・ディグリー・プログラム（PDP）の授業効果について

PDP に所属している学生からは、授業を通じて、日本人が英語で授業することの難しさや、英語を勉強することと英語で勉強することは全く違うことがわかった、という報告があった。授

業中わからなかったことへのフォローアップとしては、学生の側では毎日平均 3 時間の復習時間を確保していること、プログラムの側では日本語でのサポートや確認テスト、オフィスアワーなどを提供しているとのことだった。また、PDP はクラス人数が 10 人程度の少人数制であるため、学生の側から発言する機会が多く、理解も進みやすいとのことである。これらの利点は、以下(3)で指摘された他の科目における授業改善にも応用できるのではないかと思われた。

(2) 語学学習機会の拡充について

PDP 以外の外国語学習機会に関しては、実践的な学習の機会を増やしてほしいことや、生きた言語を学ぶために武蔵大学に留学している諸外国の学生との交流機会が欲しいという希望が聞かれた。また、武蔵大学から海外に留学する機会を拡充するために、現在年 1 回の応募時期を 2 回に増やすことや、学生側の経済的負担を減らすために半年の留学プログラムを提供してはどうかと言う意見も出された。さらに、「グローバル化」と言った場合も、現状では英語が中心となってしまっていることへの疑問も出された。学生の側では、フランス語・ドイツ語・韓国・朝鮮語・中国語など、多言語を視野に入れたグローバル化も期待されていることが分かった。

(3) 「ゼミの武蔵」、少人数教育の実態について

「ゼミの武蔵」の看板を掲げる本学ではあるが、現実のゼミの場では発表者に対する他の学生からの意見や質問の機会が少ないことも多く、よりアクティブに意見を交わせる場にしていく必要があるという意見が出された。ゼミより履修人数が多くなる講義の授業ではさらに受動的になってしまうため、「質問型授業」や、学生同士を小グループにして学ばせるグループ学習の可能性についても提案された。

また、「ゼミの武蔵」と言われながらも、実際には希望のゼミに所属できず、不本意なゼミ配属となっている学生が一定数存在してしまうことの問題性についての指摘もあった。レポートによる選抜など、教員の側では能力に基づいた公平な選抜を行っているつもりでも、学生の側からは第一希望のゼミに行けなかったことのショックは大きいようである。ゼミ選抜にあたってのミスマッチを減らしていくための、情報提供などの工夫が必要であることが分かった。



登壇学生(左)、プレゼンテーションの様子(右)

〈今後の課題〉

例年より多くの参加者を集められたことは良い点であったが、一方でこれ以上の人数になると全体ディスカッションが不可能になりかねず、今後は当日の参加者数を踏まえた柔軟な対応が求められる（サブグループに分けてのディスカッションなど）。また、提言に対して教員がリプライする時間が長すぎてしまったことや、学部ごとのカリキュラムの違いから、前提を共有できぬまま議論が進んでしまう場面もあったことなどが、今後の課題である。

（文責：中西 祐子）



学生と教職員によるディスカッションの様子

4. 教員 FD 研修報告 (1)

参加者：中西 祐子 (社会学部教授)

テーマ：教学マネジメントと FD・SD ～協働を軸とする FD の新たな潮流～

日時：2016 年 6 月 18 日 (土)

場所：TKP 市ヶ谷カンファレンスセンター

主催：日本私立大学連盟

プログラム：

－開会

－事例紹介「教学マネジメントにおける教員・職員・学生の協働」

① 川上忠重氏 (法政大学 FD 推進センターFD プロジェクトリーダー、理工学部教授)

② 山内尚子氏 (京都産業大学教育支援開発センター事務室事務長補佐)

－グループ討議 グループ 8 に所属して 2 時間半のディスカッションに参加

－総括 (グループ討議の報告、質疑応答・意見交換)

－懇親会

(0) 今回の研修の背景：開会挨拶、閉会挨拶より

- ・ 2017 年 4 月 1 日より SD が義務化される＝教職協働の法令化
- ・ これまでの FD とは異なる
- ・ 私学においては、教職協働は既にかなり導入されているのではないか
- ・ 各大学の情報を共有することが重要

(1) 事例紹介①川上忠重氏の講演概要

- ・ 法政大学では FD として、教員・職員・学生 3 者による組織的取り組みが行われている
- ・ FD 推進センターのメンバーは計 70 名で構成されている (センター長 1 名、プロジェクトリーダー 5 名、メンバー 29 名、アドバイザー 35 名、専任職員 3 名)
- ・ 学生はメンバーとしては入っていないが、2011 年以降、学生 FD との協働が開始
- ・ 学生 FD スタッフは全学部学生対象に募集。学内外イベントを随時企画・実行
- ・ 2016 年度の活動：①「学生が選ぶベストティーチャー賞」、②良い授業に関するインタビュー取材・紹介、③ピア・ネット学生スタッフ研修、交流会の参加、④他大学の学生 FD スタッフとの交流
- ・ 学生が選ぶベストティーチャー賞：
 - ①3 キャンパスで学生投票 (3 週間)
 - ②シラバスチェック (投票数だけでは選ばない)
 - ③授業に出ている学生の投票の自由記述の分析
- ・ 人気投票だけにしないためのアイデア
 - ①学生の知的好奇心をみなし、専門知識を身に着ける授業をしている
 - ②授業の運営を工夫している
 - ③学生ときちんと向き合ってくれる (授業外でも)
- ・ 学生 FD の問題点→①対象が FD (授業改善が主) なので成果が見えにくい、②学生のモチベーション維持の難しさ、③学生 FD スタッフ数の確保の困難

- ・ 学生・職員・教員協働の問題点：①今の学生は多忙で人間関係もシビア、②予想以上のエフォートが教員・職員に必要、③教員・職員の関係も必要不可欠、④理解のある人が忙しくなる、等。

(2) 事例紹介②山内尚子氏の講演概要

- ・ 京都産業大学では教育支援研究開発センター（教員 2 名（兼任）、職員 21 名）が FD 業務を行っている。業務内容：①教育の質向上に関する全学的な方針の策定・推進、②学部研究科のカリキュラム改革・改善支援・FD/SD の推進、③授業支援・授業開発、④学習支援、⑤グローバル人材育成（2012 年度文科省 GGJ 採択）
- ・ FD に関しては、「対話」を重視した教学マネジメントを実施
- ・ 出発点として過去 10 年間の「授業の相互評価アンケート」の問題点→①学生・教員へのフィードバック時期・方法の問題、②学生の回答へのモチベーションの低下、③回答結果に対する教員の不信感、④実施率・回答率の低迷
- ・ 2010 年度「第 1 回学生と教職員が共に考える FD フォーラム」
 - 学生－教員間の「良い授業」に対する考え方の違いを認識。
 - 学生「授業がわかりやすい」VS 教員「コンテンツが良い、授業内容が最先端」
 - 双方の「対話」を重視することに
- ・ 授業アンケートの改定：2 種類実施→①教員－学生間の授業に関する対話シート（＝いわゆる授業評価）、②学習成果実感調査（＝学生の自己学習評価）
- ・ ①教員－学生間の授業に関する対話シート
 - 教員と学生間の対話を促進することが目的
 - 当該学期期間中（第 1～6 週目）に実施し学生にフィードバックする（早くやる）
 - 教員独自で作成したシートでも OK
 - 教員自身で内容を分析し、実施日の翌週に学生に口頭で回答する、事務室に報告
- ・ ②学習成果実感調査
 - 学生による自分の成長の実感に関する自己評価
 - 第 14～15 週に実施
 - 全学統一質問＋学部独自質問＋教員独自質問＋自由記述
- ・ 初年次全学共通教育科目「自己発見と大学生活」の開講→新入生の 2/3 が履修、
- ・ 「京産共創プロジェクトⅣシラバス論争」（学生 FD スタッフによる企画・運営）
 - シラバスの改善アイデアを共有：学生が授業を選ぶ際に参考にしてしているシラバス項目、教職員が学生に見てほしいシラバス項目について参加者による意見交換
 - 学生はテキスト代金を見ている
 - 教員は「身につく力」「到達目標」を見てほしい→学生見えていない→教員ショック
 - 職員は授業難易度別ナンバリングを見てほしい→学生見えていない→職員ショック

(3) グループ討議 グループ 8 での討議概要（F：教員、S：職員）

＜参加大学＞龍谷 (F) [グループリーダー]、福岡女学院看護 (F)、法政大学 (S)、駒澤 (F)、立正 (S)、拓殖 (F)、天理 (F)、東京女子医科 (S)、武蔵 (F)

- ・ 教学マネジメントにおける教職員協働事例
 - ナンバリング、カリキュラムマップを導入する際に、全学的な教務委員会とカリキュラムコーディネーターの役割を担った職員によって準備を進めている

- プレゼンテーション機器を利用した演習方法を導入する年度に、メディア担当職員と教員が話し合い、デモンストレーションを重ねた。演習当日も職員が参加し、機材の使用法の説明やトラブル対応を行った。
 - FD・SD 研修を合同開催した。テーマは「ハラスメント防止」で外部講師の講演後、教職員でハラスメント防止に向けて話し合いを行った。
 - 宗教系大学は「建学の精神」をFD・SD 共同で研修会にできるのではないか
 - 武蔵大学の教務関係会議は他大学よりも教職員協働が進んでいるケースであった
- ・ 授業評価アンケートについて
 - 以前はアンケート用紙（紙ベース）で行っていた授業改善アンケートをC-Learning 導入以降、授業期間中間時に実施、担当教員が期間中に確認できるようになった
 - C-Learning（学生支援ツール）を用いて各講義の授業アンケートを行っている。アンケート結果を踏まえた「改善点」をシラバスの中に組み込みフィードバック
 - 授業評価の結果を冊子にまとめ、いつでも閲覧できるよう図書館に所蔵している
 - WEB 化することで経費がかなり安くなった。匿名でできるプログラムもある
 - WEB 化は回収率が下がるリスクがあるが、授業内に時間を設けスマートフォンで回答をしてもらう方法をとれば回収率低下の問題は回避できる
 - 自由回答欄に教員バッシングを書く事例があり、教員が傷つくケースがみられた
 - 武蔵大学の実施率、回収率は他大と比べかなり高い、アピールすべき
 - ・ 学生参画の事例
 - 各学部の情報処理教育科目にSA を配置し、授業サポートを行っている
 - 教職員協働の研修が求められているが、人権講習会や、建学の精神（宗教系）講習会などで実施することができるのではないか
 - 新入生合宿やオープンキャンパスで学生スタッフを採用している
 - 学習ステーション、FD 推進センター、授業アシスタントとして学生生活躍事例あり

4. 教員 FD 研修報告 (2)

参加者：鈴木 真也（経済学部准教授）

テーマ：平成 28 年度 FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け）

日時：2016 年 8 月 2 日（火）～ 3 日（水）

場所：グランドホテル浜松（静岡県浜松市）

主催：日本私立大学連盟

8 月初旬、前学期の教務活動が終わり、自分の授業における様々な課題点を振り返っている頃であった。そのような時期に FD 推進ワークショップに参加する機会を得て、授業方法についてより多くのことを知りたいという気持ちが強くなっていた。その意味でも、8 月初旬はワークショップ開催の時期としては非常に良いタイミングなのではないかと思う。その中で自分としては、特に、他大学・他分野の先生方がどのようなスタイルの授業で、どんな内容の話をするのか、また、そのような自分と異なる分野の講義から自分の授業に役立つことをどのように吸収することができるのだろうかと考えていた。

まず 1 日目冒頭の全体説明の後、グループ討議において、現状日々感じていることや悩みについて話し合ったが、その中で既に多くのヒントを得ることができた。例えば、授業中の私語への対処法、コメントシートの活用法、授業のスピードに関する配慮、学生の理解度を高める工夫などについてであった。また、特に自分としては、大人数での授業で学生の興味を引き付ける方法について多くの示唆に富む意見を聞くことができ有意義であった。

2 日目の模擬授業では、自分の授業に対する意見をいただくことができ、普段自分では気づけない特徴や問題点を認識することができた。例えば、話すスピードや間の取り方などについて改善の方向性を知ることができた。また、他の先生の模擬授業もそれぞれ个性的で面白く、多くの刺激や示唆を得ることができた。

プログラムの進め方については、授業の進め方だけに焦点を当てていることで、ポイントの絞れた効果的なプログラムであったと感じた。また、個々の局面ではファシリテーターとして各グループに参加している委員の先生がうまくディスカッションの進行をコントロールしてくださったおかげで、円滑で実りある議論をすることができた。

ワークショップを通じて取って板書で授業を行うことの効用が強調されていたが、実際に模擬授業を通じて体験することで確かにその通りだと実感するようになった。また、板書中は学生も集中していること、板書の取り方を指示することの意味など、細かい点についても普段考えてもいなかったことを再認識させられた。今後の授業では、板書に加えて、一回のディスカッションの時間を十分多めにとる、自分が話す際に少し多めに間を取ることなど、学生にとって聴きやすく参加しやすい講義を行うために必要な細かい時間の使い方に留意して授業を行おうと考えている。

4. 教員 FD 研修報告 (3)

参加者：川島 浩平（人文学部教授）、森 健一（人文学部准教授）

テーマ：能動的学修の教員研修リーダー講座

日時：第1回 2016年 8月27日（土）

第2回 2016年 9月24日（土）

第3回 2016年10月29日（土）

場所：第1回 主婦会館プラザエフ、第2・3回 アルカディア市ヶ谷（私学会館）

主催：一般社団法人全国大学実務教育協会

全国大学実務教育協会が主催する、「能動的学修の教員研修リーダー講座」に本学からは人文学部教授川島浩平先生と2名で参加した。他の参加者も、全国の大学から学部や学生数の規模などが異なる様々な大学から参加されていた。

この講座は、能動的学修の理解を深めること、学生を能動的学修へ誘う技法および方法を習得すること、能動的学修の授業デザインとその運営の仕方を習得すること、そして、教員として能動的学修の実践力を向上させることを目的として開講されている。教育改革に取り組んでいる大学および短期大学において、これまでの教員による一方的な受動的学習から学生の主体的な学びによる能動的学修への転換が急務であるなか、この改革と歩みを共にしている講座が今回の講座である。上記にあげた講座の目標達成について、能力向上のためには講座プログラムによる様々な教育体験を重ねて成就されていくため、いずれのプログラムも実践形式のものが大部分を占めて行われた。以下は、3日間のプログラムの概要である。

<初日プログラム>

- 開会式、オリエンテーション&インタビューによるメンバー紹介
- 理解促進テスト（事前課題学習の答え合わせ）
- 講義—能動的学修とは（山梨県立大学 清水一彦先生）
- 事例発表 実践事例に学ぶ、ワールドカフェの活用方法を身につける
- 事例研究の授業準備・授業のすすめ方を理解する
- ブレーンストーミングの活用方法を身につける
- 次回への課題 技法を活用して教育実践できるようにする

<2日目プログラム>

- 課題の発表 教員としての「学びの技法」や「授業方法」の工夫の成果と課題
- 学内体験学修の方法 学生を能動的学修に誘う学修技法を体験の中から学ぶ
- 授業デザインの仕方1 担当科目の授業デザインの基礎を修得する
- 授業デザインの仕方2 デザインの全学的推進における自分の役割を考える
- 次回への課題 担当科目のシラバス作成

<3日目プログラム>

- 課題の発表 グループ内でシラバスの発表およびディスカッション
- 実践演習 グループで代表の授業を選出し、そのプログラムを実践する
- 能動的学修に関するレポート作成、能動的学修のための教員用評価表の作成
- 能動的学修の教員研修リーダー講座修了認定書の授与、閉会式

3 日間の研修ということもあり、非常に多くの能動的学修のための学びの技法を学ぶことができた。そして、毎回の研修の課題内容に学びの技法の実践が組み込まれており、予習と復習が連動されていた。研修期間も後学期授業期間中ということもあり、実践には自身が受け持つ授業を対象とすることから、学生の反応もリアルに体感することもでき、即時フィードバックされているようであった。

研修を通して感じたこととして、“おもしろい” 授業内容も必要であるが、その内容を伝える手法、指導法などのテクニカルな部分にももっと目を向けるべきであると思われる。「学生が主体的に問題を発見し答えを見出していく能動的学修への転換」と様々なところで目にするものの、学生のために、知的欲求を目覚めさせ課題探究のおもしろさを伝えるために、深い学びを提供するために、教員の教育に対する意識改革および危機感が問われていると思われる。能動的学修は学生にとって基礎的な能力を育てるだけにとどまらず、教員側にとっても社会にとっても、新たな創造力を持った有益な人材の育成の効果を生み出し、社会全体の好循環を生み出すものであり、授業科目における能動的学修や体験学修の導入は教育改革において急務であり、大学全体で取り組む協働作業であろう。そのために、組織の一体化が必要となる。

本学の建学の理念のひとつに「自ら調べ自ら考える力ある人物」がある。およそ 100 年も前に掲げられた理念が、今はアクティブ・ラーニングという名称で学生の能動的学修が求められていることを思うと、教育の本質は時代によって変化せずに一貫して受け継がれているのだと強く感じた。

また、「知と実践の融合」の必要性も掲げており、学生が知識を得てそれをどのように実践することができるか、そして、教員はどれだけ能動的な学びを提供できるか、導くことができるかといった部分においてもアクティブ・ラーニングの必要性があるといえる。それらも踏まえて、教員も学び続けなければならない。

5. 教務 FD 報告「閲覧者にとって分かりやすいシラバス作成にむけて」

川島 浩平（教務部長）

閲覧者に対して、従来よりも授業内容を伝えやすくするための配慮から、平成 29 年度シラバスでは入力項目においていくつかの変更を行なった。ここでは、その変更内容について報告する。

平成 29 年度シラバスにおける前年度からの変更点ならびに目的は以下のとおりである。

- (1) 「履修上の注意と事前学習」を「履修上の注意」と「授業外学習」に分割した。
 - ・「履修上の注意」には、履修にあたっての前提条件や諸注意等を記載し、「授業外学習」には、授業外で行う予習、復習などの学習の内容を具体的に記載するものとする。
- (2) 「授業の概要と到達目標」を「授業の概要」と「到達目標」に分割した。
 - ・「授業の概要」には、授業担当者を主語として、授業の内容、目標、進め方について分かりやすい言葉で記載するものとする。
 - ・「到達目標」には、履修者を主語として、“何が身につけられるのか”がわかるように、評価測定が可能な具体的な到達目標を記載するものとする。
- (3) 「評価方法」を「評価種別」と「評価割合」と「評価基準等」に細分化した。
 - ・成績評価の対象となる「種別」（筆記試験・小テスト・レポートなど）、その評価の「割合」、そしてそれらに対する「評価基準等」を記載するものとする。

また、以下の項目をシラバス入稿時の必須項目とし、入稿システム上で入力の有無のチェックと制御を行なった。

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| ・ 授業の概要 | ・ 到達目標 |
| ・ 授業外学習 | ・ 授業計画 |
| ・ 3S ^{*1} の Q&A 利用 | ・ 3S ^{*1} のクラスフォーラム利用 |
| ・ 3S ^{*1} の出欠管理利用 | ・ 評価方法 |

^{*1} 3S(Musashi Study Support System) 学習支援ポータルサイト

さらに、教育の質保証の観点から、授業担当者によるシラバスの提出後、昨年度に引き続き、教務担当教員によるシラバス内容の点検を行なった。不備が認められる場合は、教務担当教員を通じて、授業担当者に修正の依頼を行なった。